

國學院大學學術情報リポジトリ

皇典研究所・國學院と『古事記』：
特集研究開発推進機構十周年

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 渡邊, 卓 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001739

皇典講究所・國學院と『古事記』

渡 邊 卓

はじめに

研究開発推進機構は本年をもって発足十周年を迎えた。本機構は、本学の建学の精神を闡明・具現化し、それを将来にわたって強固なものにするために策定された「國學院大學二十一世紀研究教育計画」に基づき、本学における研究教育活動の重点的推進とその成果発信の拠点となるべく、平成十九年（二〇〇七）四月に発足した研究教育機関である。本機構には機構長が置かれ、機構長の直轄組織としてあるのが研究開発推進センターである。同センターでは、外部組織との連携や大型助成金の申請など対外的にも二十一世紀研究教育計画に則って事業を進めている。このほか研究開発推進機構内には、日本文化研究所、学術資料センター（考古学資料館部門・神道資料館部門）、校史・学術資産研究センター、國學院大學博物館がある。そして、このたび平成二十九年三月に新たに設置されたのが古事記学

センターである。機構内の研究機関は、機構長の元に設置されているのに対し、古事記学センターは機構内に置かれながらも、二十一世紀研究教育実施委員会や学長のリーダーシップの下に事業を推進する研究機関である。私は機構内において、研究開発推進センター、校史・学術資産研究センター、博物館、古事記学センターを兼務し、研究・教育活動に従事しているため、本講座では、各機関が関わる研究事業に基づきながら、皇典講究所・國學院といった学
校史や、本学が所持する学術資産、および古事記学センターの働きについて述べることにしたい。

一、古事記学センターの設置

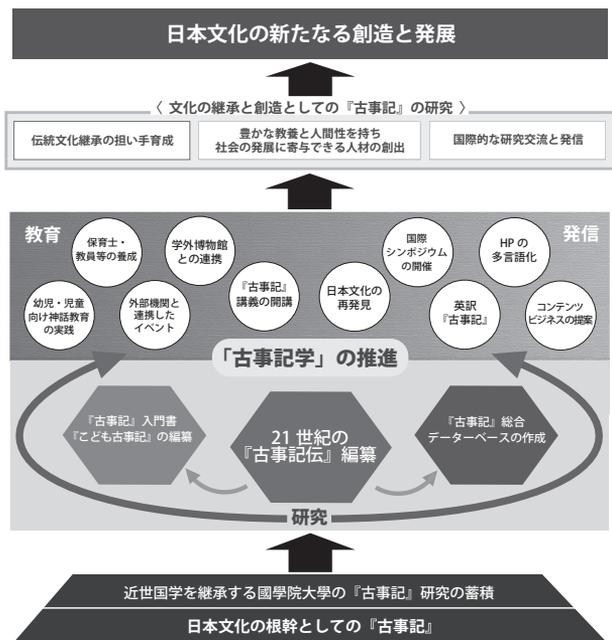
古事記学センターが設置された理由は、本学が平成二十八年度文部科学省私立大学研究ブランディング事業に選定されたことによる。研究ブランディング事業とは、文部科学省によって平成二十八年度から公募が開始された。学長のリーダーシップの下、優先課題として全学的な独自色を大きく打ち出す研究に取り組む私立大学等に対し、経常費等を重点的に支援する取り組みで、初年度の平成二十八年度は全国の私立大学から一九八件の申請があり、四〇校（タイプA「社会展開型」・一七件、タイプB「世界展開型」・二三件）のうちの二校として國學院大學の「古事記学」の推進拠点形成―世界と次世代に語り継ぐ『古事記』の先端的研究・教育・発信―が採択された。本学はタイプBでの選定であり、「古事記学」に象徴されるように、『古事記』を中心に据えながら、先端的研究成果を世界的に発信しようというものである。

本学は、このブランディング事業への応募に際して、唐突に『古事記』を研究し始めたわけではない。「古事記学」事業は、二十一世紀研究教育計画で提起された、「日本文化の国際的理解に向けた研究（国際日本学）の推進」を具

現代化する研究事業として、平成二十五年度の後期より「『古事記』の学際的・国際的研究」として開始され、平成二十七年からは「古事記学」の構築」として事業展開してきた。これは、日本文化の根本を理解する鍵となる「古事記」について、國學院における従来の研究成果を踏まえた上で、学際的・国際的視点から理解し、本学独自の「古事記学」の構築を目指すものである。「古事記学」の推進によって、「古事記」を人類共通の遺産として位置づけ、日本文化の独自性と普遍性を示すとともに、伝統文化継承の担い手を育成することを目的とする。そして本学が世界と次世代に「古事記」を語り継ぐ独自の拠点となることで、日本文化の新たな創造と発展に寄与することを目標としている。この文部科学省への申請業務は、研究開発推進センターが中心となつて行われ、このたびブランディング事業へとつながったのである。

そもそも、古事記学事業は、本学がこれまでに培ってきた「古事記」研究に基づき、それを発展・継承するものである。事業における取り組みとしては、次のようなイメージ図によって説明したい。

イメージ図のように、根底に日本文化の根幹として『古事記』があり、近世国学の学問を継承する本



現化する研究事業として、平成二十五年度の後期より「『古事記』の学際的・国際的研究」として開始され、平成二十七年からは「古事記学」の構築」として事業展開してきた。これは、日本文化の根本を理解する鍵となる「古事記」について、國學院における従来の研究成果を踏まえた上で、学際的・国際的視点から理解し、本学独自の「古事記学」の構築を目指すものである。「古事記学」の推進によって、「古事記」を人類共通の遺産として位置づけ、日本文化の独自性と普遍性を示すとともに、伝統文化継承の担い手を育成することを目的とする。そして本学が世界と次世代に「古事記」を語り継ぐ独自の拠点となることで、日本文化の新たな創造と発展に寄与することを目標としている。この文部科学省への申請業務は、研究開発推進センターが中心となつて行われ、このたびブランディング事業へとつながったのである。

学の学問的蓄積をもって、二十一世紀の『古事記伝』となる註釈書を編纂し、それを教育に還元するとともに、研究を国際的に発信する。文化の継承と創造としての『古事記』研究として、人材の輩出や国際的な発信を行い、加えて、この事業が日本文化の新たな創造と発展となるべき礎となる、そういった大きな構想のもと事業に取り組んでいる。奈良時代に編纂された『古事記』を中心にしながら、それだけを研究するのではなく、その周辺学問や『古事記』に立脚した学問を研究していくのが本事業の中心にある。

二、国学者と『古事記』

なぜ、『古事記』を研究することが國學院のブランドにつながるのかについては、近世国学まで遡って説明する必要がある。國學院には近世国学以来継承されてきた、古典研究の学問蓄積がある。国学という学問概念については諸説あり、辞書や研究者によっても説が異なる。私の考える国学とは、日本の古典籍や古器・古物等を学問対象に、文化的諸事象・事物の成り立ちを実証的に考究して、神道・伝統文化に基づく心を究明する総合的な日本文化学であるといえる。日本の伝統文化研究の学問的営為そのものを指して国学といえるのではなからうか。このように考えると、日本の国柄や民族意識を考究する〈日本の心をみつめる学問〉として考えたい。

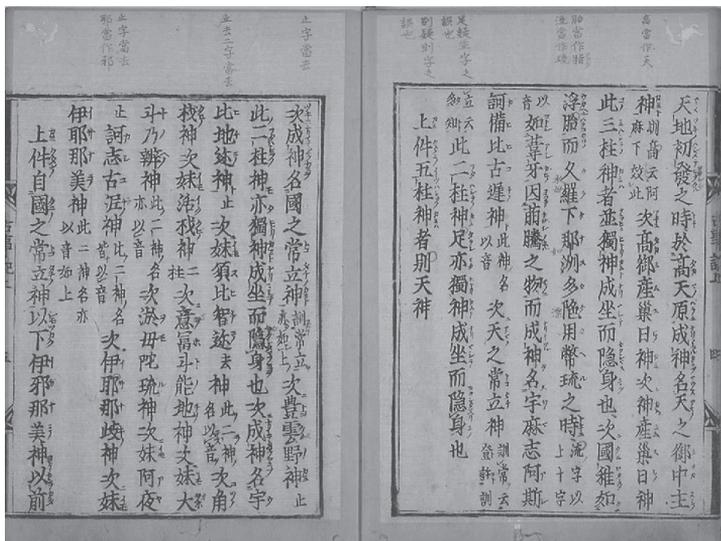
江戸時代に国学を担っていた研究者を国学者と称するが、代表的な四名としては、荷田春満、賀茂真淵、本居宣長、平田篤胤がいる。この四名は「国学の四大人」といわれる。なかでも本居宣長は国学の大成者として有名である。『古事記』が盛んに研究されるようになったのも、宣長の活躍による。『古事記』は和銅五年（七一二）にできたと言われるが、その研究史を眺めると、奈良時代以降に連綿として研究がされてきたとは言いがたく、近世になってようやく

研究が盛んになったといえる。中世にも研究はあるが、その量はわずかであり、近世までは『古事記』よりも『日本書紀』が中心的に研究されていた。

近世になると出版文化の隆盛により、多くの人が『古事記』を読むことができるようになり、本文を読み、校訂や註釈を施すなどの研究が広がった。現代の我々もそうであるが、学説は師から弟子へ継承され展開していく。国学者の研究として、荷田春満の事例をみてみよう。

本学図書館には学術資産として、荷田春満訓点書き入れ本の『古事記』が所蔵される。これは春満自身が書き入れをしたものではなく、春満の学説を弟子が書き入れたものである。書き入れは『古事記』の寛永版本（寛永二十一年（一六四四）刊）に行われている。書き入れをみると、版本にある『古事記』の文字遣いを正したり、語彙に簡単な註釈を施している。

この本学所蔵の荷田春満書き入れ本は、本学の二二〇周年行事の一環として刊行された『新編荷田春満全集』の第一巻に収載されている。この『新編全集』刊行に伴



荷田春満訓点書き入れ本

う本学の調査によって、春満の学説を書き入れた版本は、複数存在することが明らかとなっている⁽²⁾。本学の周年事業として荷田春満を取り上げたのは、四大人の一人目であり、国学の鼻祖・始祖とも称される春満が、四大人のなかで、唯一、十全な全集が刊行されておらず、本学の学問形成を考える上でも重要な事業であったからである。

『古事記』 版本への書き入れとしては、春満の弟子である真淵も自説を書き入れている本があり、また真淵の弟子である宣長も自身の研究成果を版本に書き入れている⁽⁴⁾。このように国学者の学説は、口承のほかに版本（テキスト）への書き入れなどによって、次世代へと継承されていったのである。しかし、春満や真淵の時代は、まだ『日本書紀』を中心とする時代であり、『古事記』が第一の古典となるためには宣長の登場まで俟たねばならなかったのである。

三、宣長の『古事記』研究

宝暦十三年（一七六三）五月、宣長は松阪で師となる賀茂真淵に謁見し、その際に『古事記』を研究することを勧められ、『古事記』研究に着手することとなる。有名な松阪の一夜の出来事である。真淵も『古事記』の重要性については、その著書『延喜式祝詞解』のなかで、

一古史ヲ引ニ古事記ヲ先トシ日本紀ヲ次トス。（中略）古事記ハ上古質直ノ国史也。且国語ヲ専トシタレハ上古ノ風ヲ見、古語ヲ知、古文ヲ察スルニ及モノ無レハ也。

と述べている。宣長が真淵と謁見したのはこの一回限りであったが、そののちも書翰などを通して教えを受けている。そして、宣長は『古事記』の註釈活動に本格的に取り組むこととなり『古事記伝』を上梓するのであった。本学のプランディング事業が二十一世紀の『古事記伝』を編纂しようというのも、ここに起因している。宣長は僅か三巻の『古

『古事記』を三十五年の月日を費やして研究し、全四十四冊の注釈書を執筆した。これは刊行されたことによって、門人だけではなく広く流布することとなった。『古事記伝』完成後、宣長は『うひ山ぶみ』という初学者むけの随筆を著している。そのなかで、宣長は次のように述べる。⁶⁾

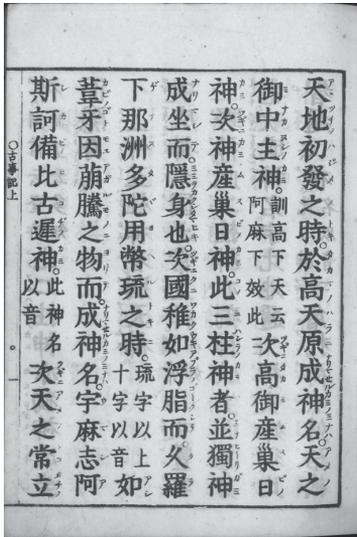
道をしらんためには、殊に古事記を先とすべし。まづ神典は、舊事紀古事記日本紀を、昔より、三部の本書といひて、其中に世の學者學ぶところ、日本紀をむねとし、次に舊事紀は、聖徳太子の御撰として、これを用ひて、古事記をば、さのみたふとまず、深く心を用る人もなかりし也、然るに近き世に至りてやうく、舊事紀は眞の書にあらざり、後の人の撰び成せる物なることをしりそめて、今はをさくくこれを用る人はなきやうになりて、古事記のたふときことをしれる人多くなれる、これ全く吾師大人の教によりて、學問の道大にひらけたるが故也、まことに古事記は、漢文のかざりをまじへたることなどなく、たゞ古よりの傳説のまゝにて、記しざまいとくめでたく、上代の有さまをしるに、これにしく物なく、そのうへ神代の事も、書紀よりは、つぶさに多くしるされれば、道をしる第一の古典にして、古學のともがらの、尤尊み學ぶべきは此書也。然るゆゑに、己壯年より數十年の間、心力をつくして、此記の傳四十四卷をあらはして、いにしへ學のしるべとせり、

宣長以前は中世以来の考え方として『古事記』『日本書紀』『先代旧事本紀』を「三部の本書」として重要視していた。しかし、『日本書紀』に比べると『古事記』はあまり重んじられては来なかった。しかし、『うひ山ぶみ』で述べられるように、宣長の研究によって『古事記』が第一の古典となったのである。

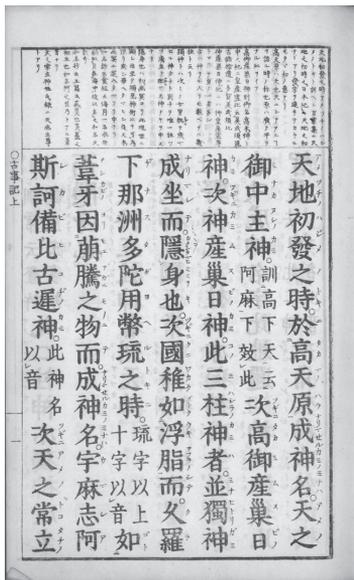
宣長の『古事記伝』の影響は大きく、『古事記』を読んで『古事記』を學ぶというよりも、『古事記伝』を読んで『古事記』を學ぶといつても過言ではない状況になった。『古事記伝』は、寛政九年（一七九七）に卷十七（上卷分）まで公刊され、文政五年（一八二二）に卷十八以下（中下卷分）が公刊された。『古事記伝』は宣長校訂の本文・註釈にて構成され

ている。しかし、冊数としては大部であり、そこで門人の長瀬真幸などは、『古事記伝』に基づいた宣長校訂による『古事記』を出版したいと申し出た。そして、刊行されたのが『訂正古訓古事記』である。『訂正古訓古事記』に付されている宣長の跋文によると、既刊の寛永版本や『鼈頭古事記』を批判し、自身の知見による本文を作成した旨が記されている。『訂正古訓古事記』享和三年（一八〇三）十月に公刊されるが、これは宣長没後二年のことであった。そのため、上巻の校訂には宣長説が反映されるが、中下巻は宣長没後の作業となった。そのため、刊行を急ぐあまり中下巻は必ずしも『古事記伝』が反映されておらず、むしろ先行する『鼈頭古事記』に近いものとなっている。

宣長は、『古事記伝』を著すにあたり、校訂本文作成のために版本の他、村井古巖本と真福寺本の転写本、その他一、二本を見ている。このなかに、現存最古の完本である真福寺本が含まれるが、宣長が見ていたのは転写本であり、現物ではなかった。現代では真福寺本に対校する諸本として卜部家の兼永本などがあるが、宣長は卜部系諸本は実見



本居宣長『訂正古訓古事記』



村上忠順『古事記標註』

しておらず、諸本校合の観点からいえば、点数はそれほど多いとはいえない。しかし、宣長が著した『古事記伝』と『訂正古訓古事記』の影響は大きく、この二つは明治期になっても刊行されている。この需要の高さからも『古事記』研究における宣長の存在の大きさが物語られている。たとえば、明治期に入って最初の註釈である村上忠順の『古事記標註』（明治七年（一八七四）刊）も宣長影響下にあると言つて良い。『古事記標註』の本文は、『訂正古訓古事記』のものであることは一目瞭然であり、忠順はそれに注釈を加え刊行したのである。近代になっても、刊行されるテキストの多くは『訂正古訓古事記』を底本とするものがほとんどであった。

四、皇典講究所・國學院と『古事記』

こういつた国学の伝統を受け継ぐ國學院は明治十五年に設立した皇典講究所を母胎としている。皇典講究所では、神道と国学、いわば神職養成と古典研究の学校である。皇典講究所・國學院の教壇には、国学四大人の学統に連なる国学者たちが立ってきた。そして、その学統は近代人文学の礎を築いていったのである。そのため、本学の学問は人物的に見ても、国学の延長線上にあるのである。

皇典講究所は神職養成の機関であったわけだが、そのための教科書として皇典講究所から刊行されたもののなかに『古事記講義』（明治二十四年（一八九一）刊）¹⁰などもあった。また、伊勢神宮大官司や神道事務局副管長などを歴任し、本学ともゆかりのある田中頼庸が著した『校訂古事記』（明治二十年（一八八七）刊）などは、本文校訂に力を入れており、宣長が見た諸本の数を大きく上回る諸本を校訂に加えている。そればかりではなく、『古事記』以外の『日本書紀』や『風土記』といった文献とも広く校合し、註の根拠としている。この頼庸の校訂作業に携わった人物として、

皇典講究所創立に関わった飯田武郷や井上頼圀が知られている。武郷は皇典講究所講師であり、『日本書紀』の註釈である『日本書紀通釈』（明治三十五年（一九〇二）～明治三十六年（一九〇三）刊）の作者としても知られる。頼圀は『古事記考』（明治四十二年（一九〇九）刊、明治書院）という註釈を作っている。また、皇典講究所では本居豊頼・井上頼圀・上田萬年らが中心として校訂作業を行った皇典講究所蔵版『校定古事記』（明治四十五年（一九一〇）刊）がある。これは明治四十四年三月に靖国神社において挙行された「古事記」撰上千二百年記念祭に際して出版された校本である。校定本・皇典講究所本・皇典講究所校定本とも称される。このほかにも、『古事記』の明治期以降に刊行されたテキストを見てみると、多くが国学者や本学とゆかりのある人物の手によるものが占め、テキストの他に研究論文などを加えると、その数は更に多いのである。こういったことから、本学で『古事記』研究は継承・発展してきたといえるのである。

加えて、近代の『古事記』研究にあつて、本学の歴史としても注目すべき人物がいる。それは國學院の一期生であり、のちに本学教授となった三矢重松¹⁾である。三矢は折口信夫の師としても知られる人物であるが、三矢も『古事記』の研究を行っていた。三谷は大正十二年に学位請求論文『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』を提出し、本学の博士号第一号となったのである。この研究は、現在も顧みられることが多く、国語学的観点や用字法から『古事記』本文研究を行っている。もう一人、注目すべきは三矢の次の世代の研究者である武田祐吉²⁾である。武田は、折口信夫の盟友としても知られる。武田は、それまで宣長のテキストが優勢であったなかで、『訂正古訓古事記』を用いず、真福寺本を底本として『古事記』を読むべきだと指摘している。その武田が作った『古事記』のテキストとしては、角川文庫から出版されたものが知られている。角川文庫は版を重ね、武田の弟子で、現在は本学名誉教授である中村啓信が解説に加わることで改訂され、現在は、中村啓信解説の『新版古事記』として刊行され続けている。

五、『古事記』上卷冒頭部の訓読

このように見てくると、国学からの学問が國學院には流れており、宣長を始め数多くの研究者が行ってきた『古事記』研究を継承していることがわかる。『古事記』序文によると、『古事記』は太安万侶によって稗田阿礼が誦習した歴史を文字化したものである。そのため『古事記』研究とは、文字化された資料から稗田阿礼の誦習まで遡ろうとする行為ともいえる。その端的な例が、『古事記』の訓読文の作成である。宣長も『古事記』を訓読するにあたり敬語を補読したり古語を尊重したりするなど、研究に基づく訓読方法を提唱している。宣長は『古事記』のなかに古学を求め研究を進めた。これによって『古事記』の古典としての地位が確立し、「神典」のような存在へと昇華されていったといえる。そうして、『古事記』は『日本書紀』と位置関係が交替し、第一の古典として位置づけられることとなったのである。

『古事記』の訓読に対する努力は、今も昔もかわらない。例えば、『古事記』上卷冒頭部の「天地初発之時」にも、いくつかの訓みが提示されており、いま現在、正解が導き出されているわけではない。古写本によると『古事記』冒頭部は、「アメツチハジメテヒラルク」と訓まれているが、宣長は、「アメツチハジメノトキ」と訓読した。宣長訓は、その後の訓読文の指針となり、多くがこれに従っている。だが、国学を継承する本学の研究者たちも、宣長同様に『古事記』の訓読研究を行っている。同様の箇所を、三矢重松は、宣長訓に賛同しつつも「之テンチシヨホツと音讀して、意義は通ずべし。さては悪しかるべきか。」と述べ、音読の可能性を提示している。三矢の薫陶を受けた折口信夫は『古事記』の訓読について次のように述べている。¹⁵⁾

古事記なんか御覧になりましたも、漢字の表現、漢文表現と、日本の国語の表現法とが、どこまで調和させてい

けるかと言ふ工夫なのでせう。ですから、それを全部、日本語で読んでしまふのも考へものです。さうして、自然どうしても読めない処も出て来るだらうと思ひます。本居宣長先生は、勝れた人ですから、それをどうなりかうなり読んで参りましたが、万葉集なんか形式の上からみますと、やはりこれは漢文の形式の上に、どれだけ国語が盛れるかと言ふ事をやつてゐるのです。

折口は、『古事記』をすべて日本語として訓まず、漢文体の『古事記』の文体を尊重している。また、『古事記』冒頭の訓読について、中村啓信は「アメツチハジメテヒラクルトキニと認定したい。」⁽¹⁶⁾と述べ、宣長以前の訓読を尊重する。このように、国学からの流れをくむ國學院の学問にあつても、全員が一致した見解ではなく、それぞれの研究者の立場から論じていることがわかる。近年の本学にあつては、古事記学事業の成果刊行物として『古事記學』を刊行している。はじめに述べたように、本学が取り組む二十一世紀の『古事記伝』として位置づけられるものである。そのなかで、谷口雅博による訓読では、「ハジメテオコリシトキニ」と訓んでいる。⁽¹⁷⁾

このように、上代文献である『古事記』の訓読は、近世に研究が盛んになるも、いまなお不明な点が多く、研究が続けられているのである。宣長による研究の価値が問い直されているのが現在である。宣長説をただ盲信するのではなく、『古事記』を読み直すことが繰り返し行われているのである。

おわりに

國學院大學が『古事記』研究を行う理由については、以上に見てきたように本学の歴史や、『古事記』研究史からもわかって。まさに本学における『古事記』研究とは、『古事記』の序文にある、

歩むと驟くと各異にして、文れると質なると同じくあらねども、古を稽へて風猷を既に顔へたるに繩し
 たまひ、今を照して典教を絶えむと欲るに補ひたまはずといふこと莫し。
 に顕れる、「稽古照今」の考えに通じる。古典研究は現在を考えることに繋がるのである。我々は古典研究を通じて、
 古典の英知を現代の生活に還元し、日本人としてどう日本文化を発信するかといったことを考えなければならないの
 である。

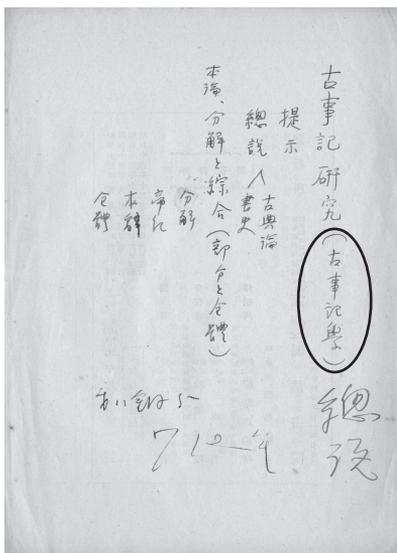
この「稽古照今」の思想を大切にしていたのが武田祐吉である。本学が取り組む「古事記学」という用語も、造語ではなく武田祐吉が用いているものである。武田祐吉の講義メモの中で『古事記』研究は「古事記学」であるとする箇所がある。このメモに「古事記学」を見出したのは、本学教授であった青木周平である。本学が取り組む事業の方向性を、示唆するメモのようにも見える。

そしてまた、本学の学則第一条には、

本学は、神道精神に基づき人格を陶冶し、諸学の理論並びに応用を攻究教授し、有用な人材を育成することを目的とする。

とある。神道精神を支えるものとして神道古典があり、宣長が言うように道を知るための第一の古典は『古事記』である。

以上のように、本学の『古事記』研究について述べてきたが、本学が取り組む研究には、国学から連綿とした学問



武田祐吉講義メモ

の系譜があり、その学問を支える学術資産や資料を本学は有している。本機構は、そういった背景に基づき様々な研究事業に今後も取り組んでいく。そういう意味では『古事記』研究は、その可能性のほんの一端であると言っても過言ではないだろう。

註

- (1) 『新編荷田春満全集』全十二巻（新編荷田春満全集編集委員会編、平成十五年～二十二年、おうふう）。
- (2) 本学の東丸神社の調査によって、春満門人である大西親盛による書入本も確認されている。
- (3) 賀茂真淵書入本は多和文庫所蔵。
- (4) 本居宣長の手沢本は本居宣長記念館所蔵であり、寛永版本のほか、『訂正古訓古事記』刊行のための書き入れがされた『鼈頭古事記』も伝わる。
- (5) 引用は『賀茂真淵全集』第七巻（昭和五十九年、続群書類従刊行会）に拠る。
- (6) 引用は『本居宣長全集』第一巻（昭和四十三年、筑摩書房）に拠る。
- (7) 江戸中期の国学者で京都の書籍商。蔵書数千部を伊勢の林崎文庫に奉納した。天明三年（一七八三）に、宣長は校合を行った。
- (8) 宣長は天保七年（一七八七）に校合を行っている。
- (9) 江戸後期―明治期の国学者。本居内達の門人。維新後は神道教化に尽くした。
- (10) 明治二十四年（一八九一）刊。皇典講究所水穂会。本居豊穎・佐伯有義述。

本書は、神官資格試験のための教科書である『学階試験科目全書』の第三卷にあたる。『古事記上巻講義』と『古事記中巻下巻講義』（明治二十五年）の二分冊で刊行された。このほかに、『日本紀講義』『職原抄講義』『古語拾遺講義』などがある。

(11) 国文学者。明治二十三年（一八九〇）九月國學院に第一期生として卒業。はじめ文部省官房図書課に入ったが、時の文部大臣を批判して自ら辞職し、教育者の道に入る。

(12) 国文学者。國學院大學卒業後、神奈川県立小田原中学校教諭となるも依願退職し、東京帝国大学の万葉集校訂嘱託となる。三十五歳のときに國學院大學講師、後に國學院大學教授となり、國學院の学問に貢献する。

(13) 「天地初発之時」の訓みについては、以下のようなのが提示されている。

① ヒラク型

アメツチハジメテヒラクル（ヒラケシ）トキ

② ハジメ型

アメツチ（ノ）ハジメノトキ

③ オコル系

アメツチハジメテオコリシトキ

④ アラハル系

アメツチハジメテアラハレシトキ

(14) 三矢重松『古事記に於ける特殊なる訓法の研究』（大正十四年、文学社）に拠る。

(15) 折口信夫「国語と民俗学」（初出「愛知県教育会・民間伝承の会共催民俗学講習会講演筆記」、昭和十二年

三月)。引用は『折口信夫全集』第十九卷（平成八年、中央公論社）に拠る。

(16) 中村啓信「天地初発之時」の訓み」（『國學院雜誌』七六一一、昭和五十年十一月）。

(17) 谷口雅博「補注解説「天地初発」の訓義」（『古事記學』第一号、平成二十七年三月）参照。

(18) 青木周平「武田祐吉の〈古事記学〉—講義ノートを通して—」（國學院大學伝統文化リサーチセンター研究紀要
一、平成二十一年三月）。後に『青木周平著作集』下卷（平成二十八年、おうふう）所収。